

# 自律的学習の領域横断的研究の試み —学習メディアの視点から—

## An Explorative Study on Interdisciplinary Review on Autonomous Learning: From the View of Learning Media

高林 友美 TAKABAYASHI, Tomomi

● 国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科  
Graduate School of Arts and Sciences, International Christian University

佐々木 輝美 SASAKI, Teruyoshi

● 国際基督教大学  
International Christian University

 **Keywords** 自律的学習, 自己調整学習, 自己主導的学習, 学習メディア  
autonomous learning, self-regulated learning, self-directed learning, learning media

### ABSTRACT

現在のICT社会においてますます注目をあびる自律的学習の研究は、教育心理学、言語教育、成人教育、など、いくつかの領域に分かれて行われている。本研究はこれらの研究を領域横断的にまとめることで自律的学習に重要な要素を明らかにしようとした。各領域の代表的な特徴としてモチベーション、対人コミュニケーションの積極性、自己理解といった要素を発見し、それらに関係する新しい要素として学習のためのメディアという視点が導かれた。更に、この視点に関して関東圏の大学生300人を対象とした調査を行ったところ、メディアリテラシーやイノベティブネスといった学習メディアの利用の傾向と自律的学習の間にある程度の相関が認められた。

Studies of autonomous learning are attracting increasing attention in current ICT society, and are spreading into various disciplines and domains such as educational psychology, language education, and

adult education. Summarizing the results of autonomous learning studies in these disciplines, this study explores the elements of autonomous learning. The results indicate the positive attitudes toward personal communication, self-understanding, and motivation constituting the representative characteristics of each discipline; in addition, a new viewpoint emerges called 'learning media.' This new viewpoint was researched in a survey of 300 university students in the Kanto area. The results revealed a moderate positive correlation between autonomous learning and learning media usage, measuring with media literacy and innovativeness.

## 1. はじめに

### 1.1 問題の所在

かつては学習のメディアと言えば本、もしくは、教師による授業などの対人メディアに限られていた。しかし現代のICT社会では、様々な学習の形が提供されている。授業を届けるものに限っても、OER, e-Learning, MOOCsといった新しい学び方が増えている。無料インターネット通話の技術を利用して外国語会話を学習する人もいれば、スマートフォンのアプリで数学の能力を鍛える人もいる。現代の学習者には学びのためのメディアがたくさん用意されているのである。

このような状況で重要になるのは、学習者の選択である。メディアが増えても学習のために与えられた時間が増えるとは限らず、学習者達は学習内容や自らの適性を考慮して何から学習するのかを自分で選んでいかねばならない。教育が多様化する中で多くの選択を迫られる現代のICT社会では、学習において高い自律性を発揮することが求められている。

この自律的学習の研究にはどのようなものがあるのだろうか。今のところ、自律的学習の研究はいくつかの分野に分かれて別々に行われており、そのため、例えば教育心理学と成人教育におけるお互いの研究成果が共有されづらい状況にある。他にも言語教育、スポーツ科学、遠隔教育、シチズンシップ教育など、様々な分野において自律的学習の研究が別々に行われている。各分野で自律的学習の研究が進められている中、分野毎の研究を横断的に見渡すことにより、自律的学習の全体像が明らかになると考えられる。さらに、本研究では特にメディアについて注目し、学習のための

メディアが自律的学習にどのような関わりを持つかを考えてみたい。

### 1.2 自律的学習とは

自律的学習について、特に日本では研究が多いとは言えない。また、自律的学習という言葉自体はしばしば使われているものの、言語教育の一部や、もしくは研究ではなく一般的・商業的文脈において使用されるなど、定義を他の文献に求めることが難しい。教育哲学者の岡田(2011)は、「自律者」とは、「『自分は自由に自己をコントロールし行為決定ができた』という達成経験」(p.3)を持つ者、という説明を行っている。また、後述のDeci and Ryanの理論から発展した「自律的動機付け」については、「自己決定感(著者註 意識的に自分の決定に主体性をもつこと)の高い動機づけ」(清水, 1998, p.130)というモチベーションに限定した説明が行われており、「自律的学習」の定義に関連はあるものの、直接的な定義としては不足がある。

自律的学習は、文字そのままの説明では「自分で自分を律して学習すること」である。しかし「律する」の意味をより明確にするため、本研究での定義は「学習過程における多くの要素の中で、自分がコントロールできるものを活用することにより、よりよく学習し続けること」とした。

この定義を行うに当たっては、教育工学の、教育を動的な過程ととらえて、関係する要素を工学的な部品の様に考えながら分析するという枠組み(Reiser, 2012)を用いた。要素のコントロールという考え方については、コミュニケーション学を参考にした。つまり、あるプロセスにおける要素を1つ1つ調整することで、良い結果を導こうと

する考え方（例えば Berlo, 1961によるコミュニケーションの精度の調整についての考え方）として「コントロール」を採用し、最終的に定義の意味が過去の研究および文字通りの意味に沿うように、上記の定義を設定した。「よりよく」の部分については単純な学習量に限らず、成績、満足感等の多面性を許容する。

なお、後に詳しく述べる通り、上記の定義と関連の深い語が海外の研究において存在する。その英語とよく使われる翻訳語は次の通りである。Self-Regulated Learning (SRL: 自己調整学習), Self-Directed Learning (SDL: 自己主導的学習, 自己管理的学習), Good Language Learner (GLL: よい言語学習者), Self-Instruction (自学, 自己教示), Independent Learning (主体的学習) など。

本稿は現代のICT社会で重要な自律的学習について、その要素を領域横断的に検討する。また、自律的学習とメディア利用との関係性についても検討する。

## 2. 研究の時代的変遷

まず、自律的学習の研究について、3つの時代で分けて概観する(表1)。以下、1) 初期の教育哲学や教育の実践家による研究、2) 多様な専門分野に細分化された科学研究、3) 最近の総合的視点からの研究、という3期の展開を概観する。

初めに哲学的な考えとして自律的学習が研究される。第1期として、例えば1910年から40年代にかけて、独自の教育施設とその特徴ある方針で知られる Montessori (1912) が、そのカリキュラムにおいて至る所で子供に選択を与えるようにしている。自律という言葉は使われないものの、教師が全てを決めるのではなく、子ども(生徒)中心主義の教育を提唱している点は、自律的学習の研究に近いと考えられ、教育工学者の Bonk (2013) も、モンテッソーリ教育に見られる自律性を見出している。また、子ども(生徒)中心主義については、ほぼ同時期に活躍したオーストリアの Steiner もそれを実践していることは良く知られている。更に、Dewey (1916) が日本で自律と訳さ

れる言葉を同時期のアメリカで論じているのも見落とせない。彼は著書で、disciplineという言葉を用いて、経験的学習によって子ども達は忍耐強い内発的興味に基づく自制と生活の力を身につけること、その際には経験の流れを失敗と共に子どもたち自身にゆだねるべきであるということを論じている(Dewey, 1916)。子どもの発達・経験の流れにゆだねるということは、本来持つ内発的興味を活かすことで教育の場における自律性が尊重されるという考え方のことだろう。教師は不在ではなく、むしろ子どもに学びを任せる者として重要な役割を持つ。

この第1期の研究者達の特徴は、経験的学習を重視したこと、そして教師として学習者の自律性を尊重したことだろう。彼らの豊富な経験に基づく考察は哲学的で、自律的学習との関連においても重要な研究であると言える。ただし、このころの学習についての研究は、教える立場からの視点が強いと言える。アメリカ国内の成人教育研究を本格的に行った Knowles (1975, p.14) が言うように、「学ぶ(learn)」が学ぶことではなく、実際には「教えられる(being-taught)」こととして捉えられていた(筆者訳)のが、まさにこの時代だろう。Deweyらの研究は、教える立場において自律性を尊重するのであって、教師が選択を「与える」という意味合いが強い。

次に第2期として、このような自律性に対する視点が教える側から学ぶ側に变化した後の研究をレビューする。第2期の特徴として、学習者について専門領域ごとに科学的手段に則った研究が挙げられる。代表的な Rubin (1975) による Good Language Learner (GLL) の研究を見ると、GLLが注目を集めるきっかけとなった最初の論文の題が「我々はよい言語学習者(GLL)から何を学ぶことができるのか」(Rubin, 1975, p.41)であった。このことから分かるように、第2期の研究では第1期で見られたような自律性の与え方ではなく、学習者達自身に注目している。

第2期における自律的学習者の研究はおおむね、教師やカリキュラムの工夫の影響だけでなく、本人達の能力・習慣としての自律的学習によって

表1. 自律的学習の研究の変遷

時期	特徴	例
第1期	教師が与える自律を考える	教育哲学 Dewey(1916)など
第2期	学習者主体の自律を、各専門的分野内で考える	言語教育, 成人教育, スポーツ科学など Rubin(1975)など
第3期	学習者主体の自律を、学習や生活全般を総合的に考える	教育心理学, 教育コミュニケーション学 Zimmerman(1986)など

特徴付けられる。Rubinらが言語教育の分野でその研究を進めて行ったように、第2期では狭く専門的な領域での研究であるために、学習内容・科目が限られているが、検証可能な形での研究の結果は、自律的学習の研究全体への貢献があると言える。

最後に第3期として、第2期の専門領域ごとの限界を克服しようとする、領域横断の可能性をもった研究がある。第3期はまだ新しく、特徴を断言できるほど多くの研究がある訳ではない。しかし学習内容や科目内に留まるという制限を乗り越えようとする点で、第2期との差別化が可能であると考えられる。

第3期には例えば教育心理学のZimmermanら(1986)の研究が挙げられる。彼らは自律的学習について科目の指定をせず、学習全般において自分でどれほど自分を調整出来るかを重視した。更には、波多野(1985)のように、教育心理学と教育コミュニケーションの領域横断の視点から、教科全般の「自ら学ぶ能力」(p.174)について述べた研究者もいる。波多野は学校への参与観察から議論を展開しているが、「自ら学ぶ能力」に関しては彼の多くの研究と違ってやや第1期の方法に近い論を展開させている。だが、彼の視点となる2つの学問分野で証明されてきた理論を用いることで、第1期と第2期の研究方法の混合に成功している。

なお、第1期から第3期として、これまでの研究を時代による方法と分野の専門性の違いで分けたが、この流れは学問分野の発展に通じるものがある。かつては宗教や哲学こそが学問であるとされたが、科学的手法の開発によって実験的な研究

が重視され始め、専門分野の細分化が進むようになった。そして現代では細分化された学問の限界から脱却し、近代化に伴って学際的な総合分野が発展しつつある。

自律的学習の研究の流れの概観は以上のようにある。ただし、ここで分類した3期については厳格な年代を定めるものではなく、これに当てはまらない研究も存在する。今日であっても哲学的自律的学習者の研究はあり得るように、時期だけで全ての研究の特徴を述べることはできない。そこで次節では、自律的学習の特徴をさらに明らかにするため、各分野における自律的学習の研究について述べる。

### 3. 各分野の研究と特徴

自律的学習の研究は多分野に渡るが、ここでは自律的学習の研究の3つの時期の内でも科学的手段を用いて研究された、2期の言語教育、キャリア発達、その他の専門分野、および3期の教育心理学での研究についてまとめることとする。

#### 3.1 言語教育

言語教育における自律的学習者の研究で特徴的なのは、積極的な対人コミュニケーションが重要な要素になっている点である。以下にその研究をいくつか紹介する。

言語学者でありながら人類学者でもあるRubinは、ニュージーランドで第2言語としての英語を教えている中で、自律的に良く学ぶ生徒がいることを発見した。彼女は2年間の教師としての参与観察に加え、彼女の教えるアメリカにある大学の

フランス語の授業の観察と生徒へのインタビューを1年かけて行なった。Wenden (1987)によると、Rubinは教師論や教育方法論ではない「学習者」についての最初の論文を発表した。その最初の論文でRubin (1975)は第二言語習得について、ある学習者達は他の学習者達に比べてより良く学ぶことが出来ること、また、その成功の差が生得的な母語の習得の成功の度合いの差よりも大きいことに注目し、より成功する第2言語学習者達の学び方の研究が他の学習者達の学びを助けることに役立つと考えた (Rubin, 1975)。彼女は成功する学習者を「Good Language Learner (GLL)」(p.41)と呼び、能力、モチベーション、機会の3つの要素が全て関係すると述べた (p.42)。3つの要素ごとにRubinの発見したGLLの特徴的行動は表2にまとめる通りである。その後Rubinの研究は後続の研究を呼び、教え方や教師のコントロールによらない要素について、様々な視点で良い言語学習者の研究が発表される。例えば最近の研究では、学習者の年齢とGLLの関係について調べられている。Norton (2011)はビデオレコーディング、手記、そしてインタビューと観察によって、5人の成人学習者について1年間、そして6人の子どもの学習者について3年間に渡り質的調査を行い、年齢に関係なくGLLはコミュニケーションを頻繁にとることのできるコミュニティを複数持つことを発見した。

また、Griffith (2008)は、過去のGLL研究で年齢に関するものをまとめている。Griffithは年齢がGLLとして特徴を持ちえることの理由として、成熟度の影響だけでなく、認知面や社会的な立場、場面の影響、更に個人的な影響があるとしている。これはEllis (1985)が12人の成人クラスと小学生のクラスの10ヶ月分の授業を観察した結果とも通じる。Ellisの観察において、成人では論理的な考えを持っていること、そして小学生レベルでは失敗を恐れないことが、GLLの特徴になると述べられている。以上のように、言語教育のGLLの研究において、教え方や教師のコントロールによらない、自律的学習者の特徴が明らかにされた。これらの結果には、共通して対人のコ

ミュニケーション能力に深く関わる部分があるが、これが必ずしも全般的な自律的学習者に当てはまるかは定かではない。また、GLLに限らずに自律性 (Autonomy) について研究する試みもあり、Holec (1981)による欧州評議会からの提言として書籍化された「ability to take charge of one's own learning」(p.3)というAutonomyの定義に従って研究が行われている。しかし、これらの研究を含めても、言語教育の自律的学習において重視される積極的な対人コミュニケーションという要素は、自律的学習を領域横断的に捉える際にも重要な要素である可能性が高い。

### 3.2 成人教育・キャリア形成論

言語学習の領域のGLL研究に続いて、教育学もしくは経営学の分野の1つである成人教育やキャリア形成論でも自律的学習の研究がある。成人教育・キャリア形成論においては、自己理解、そして自己理解に基づく学習援助の選択が特徴的である。

この領域では、特にアメリカ的経営で見られる会社内の統一された教育に頼らず独自に学習することでより高い地位や給料を得る人びとについて研究がなされた。成人教育とビジネス・トレーニングのファシリテーターとしての経験を持つKnowles (1975)はそのような自律的な学習やトレーニングをする人びとを「Self-Directed Learners」(p.vi)と名付けた。Knowlesの大きな貢献の一つは、Teacher-Directed learningとSelf-Directed learningという分類を行ったことであると考えられる。Knowlesの研究に従って、成人教育やキャリア形成論の分野ではSelf-Directed learnerとして自律的学習者のキャリアを発展させる学習について研究がなされる。最近ではBoyatzis (2001)が自身の教えるMBAのコースで実践的に、Self-Directed learnersを育成するための授業を行った結果、自身の弱みと強みについての自認を高めることがSDLを達成させるのに強く影響したことを報告している。自身の弱みと強みを自覚させることは教授法的に新しいことではないが、彼の研究はそれがSelf-Directed learningに貢献することを

示した点で重要であり、かつその授業によって多くの人がSelf-Directed learnerに近づいたという報告は、自律的学習者が生得的に決まるのではなく、誰もが自律的学習者になれることを示唆しており意味深い。日本では、知識労働者のキャリアについて三輪（2011）が、キャリア研究での自律的学習を「主体的な知識やスキルの獲得」（p.11）と「人的な相互作用を通じた学習」（p.11）に大別した上で、アンケート調査に基づいた因子分析を行い、表2に載せた5つの因子を抽出している（pp.176-182）。これはSEとコンサルタントという限られたキャリアでの研究ではあるが、研究の具体性と対象者の学習目標の達成が明確であることが評価される。ここで提示された因子は、一見言語教育と共通する対人コミュニケーションの要素だが、言語教育とは異なって学習の為の適切な援助選択の意味合いが強く、成人教育の特徴に沿っていると考えられる。

### 3.3 スポーツ科学,遠隔教育,シチズンシップ教育

その他にも第2期の研究で注目すべき分野は多いが、そのうちの3分野を挙げておく。

スポーツ科学の分野は教育心理学とは異なり、主に運動機能について研究している。Rynneら（2010）は自身で学び続けることで高い実績を持つスポーツコーチについての研究をしている。彼らはコーチ6名と、コーチを管理するスポーツセンターの上司6名に対して学習についての非構造化インタビューを行い、高い実績を持つコーチの学習で特徴的なのは、これまで注目が薄かった学習の場についてであり、「所属しているスポーツセンターなどの組織と関係するが、異なる施設での学習をする（Rynne, et al., 2010, p.321 筆者訳）」という点だと述べている。この結果は言語教育でのNortonによる、コミュニティをより多く持つこと、という結果にも通じるもので、学習全般の自律的学習者の特徴として捉えることができる。

遠隔教育では自律的学習について実践報告が多いが、基本的にモチベーションが重視されている。これについては日本でも研究例がある。浅野

（2002）は放送大学をフィールドとして、卒業、修了できた学生について、一般の大学を卒業するまで続けた人よりも学習への積極的関与と継続意志が強いことを明らかにすると同時に、これらは学生が若い時に抑圧されていた向上心と特定課題思考に起因することをインタビュー調査によって明らかにした。

シチズンシップ教育は未だ哲学的論説にあることが多いが、その実践については科学的手法で検証されている。ここで言われている自律性は、例えばNeufeld（2013）が説明するような、個々人に与えられた政治的権利としての自律性と、それを保証する倫理的な自律性である。この倫理的な自律性は普遍性の高いものであると考えられるので、将来的には自律的学習の一要素として検討されるべきであると筆者は考える。

### 3.4 教育心理学

教育心理学は2章で述べたように、学習の全般を扱おうとした点で特に意義深い分野である。主にモチベーションやメタ認知が重要な要素として特徴的である。教育心理学での自律的学習者は、Zimmerman（1986）以来Self-Regulated Learnerと呼ばれる。彼は最初の研究で100人の高校生1-4年生に対して全員にインタビューを行い、この時代に注目されていたPlan-Do-Seeの要素に分類できる10の特徴的行動の項目を示した。後に彼は10項目を事前計画段階（forethought phase）、実行段階（performance phase）、そして自己反省段階（self-reflection phase）と要素をまとめた（Zimmerman, 2000, pp.14-16）、インタビューで発見された10の項目は依然保持されている。SRLについて、その後の実験や実践報告は多いが、Zimmermanほどに実証的な調査はそれほど見られない。

その他の例として、最近の教育心理学で研究されているSelf-Determination（自己決定感）がある。ただし、この理論は自律的学習に関連すると考えられるものの、Deci & Ryan（2008）の定義を鑑みると、人間が本来持つとされる自律への志向とその教育への利用を検討するものである。自律性

表2. 先行研究で発見された自律的学習者の具体的特徴の1例

	研究者 (年)	特徴
言語教育学	Rubin(1975)	推察することが得意である, 上手く推察する
		コミュニケーションをとるために, おろかに見られることを厭わない。
		得た知識を実際に使ってみようとする
		言語やコミュニケーションに高いモチベーションを持つ
		学んだことを使う機会を持つようとする
	Norton(2001)	コミュニケーションを頻繁にとれるネットワークを, 複数持つ
Ellis(1985)	理論的な考え方を持つ	
	失敗を恐れない	
教育心理学	Zimmerman& Martinez-Pons (1986)	自分の学習を自己評価する
		学習内容を組織化してまとめて理解する
		目標を設定して計画を立てる
		より多くの情報を集める
		後で振り返ることの出来る学習の記録を取る
		学習環境を自分にあつたものにする
		自分を褒める
		覚えているかどうか自分で試す
		社会的ネットワークに学習援助を求める
	学習の記録を振り返る	
成人教育	Boyatzis(2001)	自身の長所と短所の認識を持つ
	三輪 (2011)	外部との交流とそこからの学習をする
		仕事の変革と顧客交流をする
		内部との交流とそこからの学習をする
		地道で断続的なスキル開発
	先進的知識の探究	
スポーツ科学	Rynneら (2010)	所属する組織と関係する別の組織で勉強をする

の捉え方は2章で言う第1期に近く, また, 学習の要素をコントロールすること自体がモチベーションを高めると言うものである。

### 3.5 各領域からの知見のまとめ

表2は, 各分野の研究結果を自律的学習者の特徴を行動の形にしてその内容を筆者がまとめたものであるが, 表2全体をながめると, 自律的学習者の特徴として以下の3つの要素が浮かび上がってくる。

第1点目はコミュニケーションの要素である。たとえば, 「言語やコミュニケーションに高いモチ

ベーションを持つ」(言語教育学), 「社会的ネットワークに学習援助を求める」(教育心理学), 「外部との交流とそこからの学習をする」(成人教育)などの項目からコミュニケーションの要素を読み取ることができる。

第2点目はルーティン化された自己の向上を促す仕組みの存在である。これは, 表2の中でも教育心理学の領域から読み取れる特徴であり, 目標設定→計画を立てる→自分で試す→自己評価する／振り返る→自分を褒める, というような仕組みである。

そして第3点目は, 上記の第1点目のコミュニ

ケーションの要素と密に関連している。つまり、外部から情報を得たり、外部の人とコミュニケーションを行ったりする場合は必ず何らかのメディアが必要となるので、メディア利用の要素が第3の要素として挙げられる。

#### 4. 自律的学習とメディア利用の先行研究

次に、学習メディアという視点から、自律的学習とメディア利用について考察する。このような研究例として、理論的に考えた研究にDabbagha and Kitsantasb (2012)のソーシャルメディア利用の自律的学習的構造化の研究がある。Dabbagha and Kitsantasb (2012)はSRLを、ウェブブログやWiki, また動画像共有サイトやSNSを含めたソーシャルメディアの利用に当てはめるためのフレームワークを作成している。彼ら自身が授業の実践や調査を行った訳ではないが、以前のSRL研究と学習環境におけるソーシャルメディアの利用の報告を合わせてメタ分析を行った。すると、既出のZimmermanによるSRLの理論は、明確な目標設定やフィードバックの利用など、ソーシャルメディアの利用に自然に対応することが判明したという。これを元に、ZimmermanのSRLの理論に合わせた学習場面でのソーシャルメディアの活用法と教師が教えるべき注意点をフレームワーク化したDabbagha and Kitsantasbは、効果的なソーシャルメディアの活用には知識と自律的学習のスキルが不可欠であることを強調している。この研究は、メディア利用と自律的学習を結びつけ、またその概念を理論に基づいて構造的にモデル化した数少ない研究として意義深いだろう。

理論的研究ではなく、実践報告も見つけることができた。例えば、Valjataga and Fiedler (2009)は、新しい技術を用いたメディアによって自己批判のできるSelf-Directed Learning (SDL)の1つである自律的学習の能力を高められることを報告している。更に、学習の状況と誓いについて紙に書かされるとより効果的にSDLを育てることが出来ると言う。彼らはアクションリサーチの手法をとり、26人の大学院1年生の講義において、予めブログ

やスカイプ、e-メールをコースデザインに組み込み、1度のコースデザインの修正を含めた1年間の観察と学生のセルフレポートを用いた質的研究を行った。始めのコースデザインによるクラスのセルフレポートでは、新しい技術の利用が自律的な学習をするために役立ったことが発見されたが、同時に課題や道具使用の難度が学習の障壁となっていることが観察で明らかにされた。そこで学習についての記録を自分で紙に書くという仕組みを取り入れたコースデザインの修正を行ったところ、学生達の自律的学習の獲得により大きな効果を確認できたという。Valjataga and Fiedlerの研究から示唆されるのは、自律的学習に関わるメディアが必ずしも最新技術を用いたメディアだけではなく、紙媒体などいわゆる「伝統的」メディアも関係があるということだろう。

Pata (2009)も、実践的な研究報告を行っており、SDLを促進する学習空間について述べている。Pataは2年間の授業において、ソーシャルメディアを含めて非常に多いメディアへの接続が可能な環境を設けた。53人の修士課程の大学院生のSDLを観察した結果、多様なメディアを用意しておき、利用については個人の求めるものに任せることによって、学生の自律的学習を促すことが出来ることが判明し、多くのメディアへアクセス可能な環境が存在することが重要だと説明している。

さらに、Cho & Cho (2013)の研究では、最近発達したソーシャルメディアの1つであるツイッターがSRLの訓練をより効果的にすることや、メタ認知的な認識が増すことを示している。

これらの研究により、学習メディアと自律的学習について今後研究が必要な2点が示唆される。まず研究対象とするメディアの種類である。新しく、まだ効果が証明され始めたばかりのソーシャルメディアはもちろん、旧型のメディアや対人メディアを含めた、メディアの種類や量についての分析が必要である。また、自律的学習とメディアの先行研究が、理論を作る研究やアクションリサーチが中心であるので、メディアの量的側面を明らかにすることが求められる。以上2点に従っ

表3. 自律的学習とメディア利用, 成績の相関表

	自己調整学習	イノベティブネス	メディアリテラシー	GPA	M	SD
自己調整学習	-	.33**	.31**	.25**	59.19	10.083
イノベティブネス		-	.29**	.10	65.16	10.93
メディアリテラシー			-	.14	102.8	10.38
GPA				-	2.92	0.59

\*\* $p < .01$

て、本研究では最後にメディアの視点からの研究を加え、自律的学習とメディア利用を結びつけて考える重要性を考察する。

## 5. メディア利用から見た自律的学習

### 5.1 方法

学習メディアと自律的学習の関係を調べる為に首都圏の国公立・私立大学の学部生を対象とした質問紙調査を行い、300件の有効回答を得た(回収率72%, 男性132名, 女性160名, その他1名, 無回答7名)。調査項目には自律的学習, メディアリテラシー, 新しいものに関する傾向(イノベティブネス), 大学の成績が含まれる。自律的学習は藤田(2010)の自己調整学習方略尺度を用いた。この尺度は3章で述べたZimmermanらの研究を踏まえており、日本の大学生の自己調整学習方略の得点を調べるために作成された。対人を含めたメディアの活用に関係のあるイノベティブネスについては、コミュニケーションやメディアが重要となるRogers(2003)の普及学を参考に、新しい考えや技術を取り入れるのが他と比べて早い初期採用者の特徴と、社会集団内でメンバー達の態度・行動の変化に影響力を持つオピニオンリーダーの特徴が学習者に見られるか試みた。メディアリテラシーについては、後藤(2004,2005)による尺度を技術革新に合わせて若干の修正を加えて用いた。

### 5.2 結果と考察

自律的学習の傾向を調べるために用いた自己調整学習方略の得点と他の変数との関係は表3の通りであり、イノベティブネス(新しい考えや技

術にオープンであること)と自己調整学習に正の相関があることが分かった。これはキャリア形成論で言われているSDLの特徴である「先進的知識の探求(三輪,2011)」とも矛盾しない。また、メディアリテラシーとの正の相関は、いかにメディアを賢く使うことができるかが、自律的学習に関わることを示している。また、今回調査したメディアリテラシーは4章の最後で述べたような、いわゆる「伝統的」メディアについても対応している。よって、自律的学習ではニューメディアに限らずに全般的なメディア利用の側面を考えることが必要である。

## 6. おわりに

この研究は領域横断的に自律的学習をレビューし、時代による変遷と各領域の特徴を考察したところ、1) コミュニケーションの要素、2) ルーティン化された自己の向上を促す仕組み、そして3) 情報収集や外部との交流を促すメディアの活用という3つの主要な要素が浮かび上がってきた。また、現代社会で大きく変化した学習メディアに注目して調査を行ったところ自己調整学習とメディアリテラシーに正の相関が見られた。今後は、メディアの活用という新しい要素も含めて総合的に自律的学習を研究することが望まれる。

## 参考文献

- 浅野志津子(2002). 学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその課程; 放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から教育心理学研究 **50**, 141-151.
- Berlo, D. K. (1961). *The process of communication: An introduction to theory and practice*. New York:

- Holt, Rinehart and Winston.
- Bonk, C. J. (2013). Adding some TEC-VARIETY to on-line courses. *Education Magazine*, 6, 15-20.
- Boyatzis, R. (2001). Stimulating self-directed learning through a managerial assessment and development course. In J. Raven & J. Stephenson (Eds.), *Competence in the learning society* (pp.303-332). New York: Peter Lang.
- Cho, K., & Cho, M. H. (2013). Training of self-regulated learning skills on a social network system. *Social Psychology of Education*, 16 (4), 617-634.
- Dabbagha, N., & Kitsantas, A. (2012). Personal Learning Environments, social media, and self-regulated learning: A natural formula for connecting formal and informal learning. *The Internet and Higher Education* 15 (1), 3-8.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2008). Facilitating optimal motivation and psychological well-being across life's domains. *Canadian Psychology*, 49, 14-23.
- Dewey, J. (1916). *Democracy and education*. New York: Macmillan.
- Ellis, R. (1985). *Understanding second language acquisition*. New York: Oxford University Press.
- 藤田正 (2010). 大学生の自己調整学習方略と学業援助要請との関係 奈良教育大学紀要 59 (1), 47-54.
- 後藤康志 (2004). メディア操作スキル尺度の作成に関する研究. 日本教育工学論文誌 28 (Suppl.), 149-152.
- 後藤康志 (2005). メディアリテラシー尺度の作成に関する研究 日本教育工学論文誌 29 (Suppl.), 77-80.
- Griffiths, C. (2008). Age and good language learners. In C. Griffiths (Ed.), *Lessons from good language learners*. (pp.35-47). Cambridge: Cambridge University Press.
- 波多野完治 (1985). 「学ぶ」心理学 金子書房.
- Holec, H. (1981). *Autonomy and foreign language learning*. London: Pergamon Press.
- Knowles, M. (1975). *Self-directed learning: A guide for learners and teachers*. Michigan: Association Press.
- Lee, A. (2013). Literacy and competencies required to participate in knowledge societies. Conceptual relationship of information literacy and media literacy in knowledge societies. 3-62. UNESCO.
- 三輪卓己 (2011). 知識労働者のキャリア発達—キャリア志向・自律的学習・組織間移動 中央経済社.
- Montessori, M. (1912). *The Montessori method*. New York: Frederick A. Stokes Company
- Neufeld, B. (2013). Political Liberalism and Citizenship Education. *Philosophy compass*, 8 (9), 781-797.
- Norton, B., & Toohey, K. (2001). Changing Perspectives on Good Language Learners. *TESOL Quarterly*, 35 (2), 307-322.
- 岡田敬司 (2011). 自律者の育成は可能か：「世界の立ち上がり」の理論 ミネルヴァ書房.
- Pata, K. (2009). Modeling spaces for self-directed learning at university courses. *Educational Technology & Society*, 12 (3), 23-43.
- Reiser, R. A. (2012) What field did you say you were in?: Defining and naming our field. In Reiser, R. A., & Dempsey, J. V. (Eds). *Trends and issues in instructional design and technology* (pp.1-7). Boston: Pearson.
- Rubin, J. (1975). What the good language learner can teach us. *TESOL Quarterly*, 9 (1), 41-51.
- Rynne, S. R., Mallett, J., & Tinning, R. (2010). Workplace learning of high performance sports coaches. *Sport, Education and Society*, 15(3) 315-330.
- 清水敏彦 (1998). 自己形成の心理：自律的動機づけ 金子書房
- UNESCO (2013) Global media and information literacy assessment framework: Country readiness and competencies. UNESCO.
- Väljataga, T., & Fiedler, S. (2009). Supporting students to self-direct intentional learning projects with social media. *Educational Technology & Society*, 12 (3), 58-69.
- Wenden, A., & Rubin, J., (1987). *Learner strategies in language learning*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice/Hall International.
- Zimmerman, B. J. (2000). Attainment of self-regulation: A social cognitive perspective. In M. Boekaerts, P. Pintrich, & M Zeidner (Eds.), *Self-regulation: Theory, research, and applications* (pp.13-39). Orlando: Academic Press.
- Zimmerman, B. J., & Martinez-Pons, M. (1986). Development of a structured interview for assessing student use of self-regulated learning strategies. *American Educational Research Journal*, 23 (3) 614-628.